

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2023年 5月 22日	
所属部局・学年	野生動物研究センター
氏名	白澤 子銘

<p>1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)</p> <p>神戸港～函館港</p>
<p>2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)</p> <p>海棲哺乳類実習</p>
<p>3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)</p> <p>2023年 4月 21日 ～ 2023年 4月 24日 (4日間)</p>
<p>4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)</p> <p>京都大学野生動物研究センター、北海道大学おしよ丸、三谷曜子教授</p>
<p>5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)</p> <p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>今回の実習では、この時期の日本の近海に生息する海棲哺乳における種の多様性を学ぶとともに、実際の航海ではどのような種が観察できるのか調査を行った。自分の研究分野とは全く異なる分野とフィールドにおいて、研究のみならず船上での貴重な生活を体験した。調査では、さまざまな双眼鏡を用いてこれらを通して実際の目視調査のノウハウを学ぶことができた。</p> <p>■スケジュール</p> <p>4/21 16:00 神戸港を出港 16:30～17:30 にかけて調査を行った。 4/22 紀伊水道～伊豆沖 6:30～16:30 にかけて調査を行った。 4/23 日本海溝付近～福島沖 8:00～17:00 にかけて調査を行った。 4/24 三陸沖～八戸沖 5:15～17:30 にかけて調査を行った。 4/25 津軽海峡～函館港 8:00 函館港に着港 8:30 下船</p> <p>■調査方法 前日に翌日分の観察のシフトを作成し、一人当たり7、8時間観察を行うように組んだ。観察は基本的に同時に3人(もしくはそれ以上)で行い、対象を見過ごすことがないように観察を行った。船のアップパー(甲板)において目視/双眼鏡によって Splash(水面の移動に伴う波)、Blow(噴気)、Fluke up(尾ヒレが確認できる潜水)などを目安に調査を行った。観察範囲は船首を0°とした時、そこから左右それぞれ90°までを範囲とした。発見した際にはその時の頭数と種などわかる範囲で細かな記録を行う。また、1日の観察開始から毎30分ごとにその時の海況(天候、見やすさ、海氷、視程、海面反射、風速)を記録した。海況が急激に変化した場合も記録を行う。</p> <p>■調査準備 調査を行うまでに、船が通る海域でこの時期に見られることができる種を調べ、まとめて発表を行う。実際に調べてみるとかなり多くの種が日本近海に生息しており、親潮と黒潮の合流によって作られる潮目の位置によって分布が年によって異なる。海棲哺乳類が一番多く見られる海域は、やはり紀伊半島沖～伊豆沖にかけての比較的温暖な海域であることが様々な書物に記載されていた。種ごとの特徴などをまとめて発表したが、実際海に出てこれらを観察するとなると咄嗟には判断しづらい。Splashが大きすぎると飛沫によって身体が隠れてしまうため、オットセイなのかイルカなのか全く見当がつかない。どのような種が生息しているのかを調べたら、その種ごとの泳ぎ方の特徴や、実際に野生下で泳いでいる動画などを検索して泳ぎ方の違いなどを覚えても良いかもしれない。また、船のアップパーに出ると風が強く紙が舞ってしまうこともあるため、用意した</p>

資料はスマホに PDF として入れたほうが良い。

■成果

- 4/21 観察時間が1時間と短かったため何も観察できなかった。また、西日による反射が強く観察可能な範囲に限りがあった。
- 4/22 何も観察できなかった。昼ごろから天候が崩れ始め、風が強かったためブリッジ（操縦室）から観察を行った。風が弱まり次第アッパーに戻り観察を行った。天候に恵まれず白波が多く視程も悪かったため、観察が難しかった。
- 4/23 天候に恵まれ、1日を通して見晴らしが良かった。昼頃にハナゴンドウの群れに遭遇した (Figure. 1)。遭遇時にアッパーにいたが、全く違うところを双眼鏡で覗いたため惜しくも観察することができなかった。16時55分には水平線の彼方(8、9km先)にて splash があることを三谷さんが発見した。観察経験に乏しいため splash らしきものは見られたが、それが波なのか splash なのか、自分には区別ができなかった。
- 4/24 天候に恵まれ1日を通して見晴らしが良かった。13時頃にオットセイが船首から200mほど前を遊泳していた (Figure. 2-1, 2-2)。観察終了時の17:20頃にイシイルカの群れに遭遇した (Figure. 3)。船首から左 60° あたりから船に向かって遊泳し、船と交差した後見失った。

内陸で育ったため、実際に野生の海棲哺乳類を観察できたことに感動した。水族館のように人口の環境に囚われることなく野生本来の姿を見ることによって、飼育されている個体の福祉について動物福祉の観点から、より深く考えることができた。実習では6件の発見報告があり、発見報告時はアッパーブリッジにいたが観察できずとも悔しい思いをした。そのため、船の近くで観察できた時は興奮を抑えきれなかった。4日という短い期間だったが、海棲哺乳類の世界を垣間見られて良かった。

■船上での生活

天候に恵まれている間は陸地とさほど変わらないが、天候が崩れた途端に船が左右上下に揺れ始める。船が波に揺られて上に揺れると、体がふわっと浮き上がり背筋がとてつもなくゾワつく。ゾワつく間もなく次の揺れが来るため、吐きやすくなる。一度吐いてしまうとかなりスッキリするが、吐く行為を覚えると、吐くまでの許容ラインが下がり吐きグセがついてしまう。こうなってしまうと、吐いたところで気持ち悪さは残っているため、次第に胃液しか出てこなくなってくる。お茶などを腹一杯飲んだ時には、胃液ではなくお茶そのものが出てくる。酔い止めは多めに持って行ったほうが良い。喉越しが良いゼリーなども常備したほうが良い。一度船酔いしてしまったら、すぐにでも横になって寝たほうが良い。

■写真

調査において遭遇した海棲哺乳類の写真（4枚）と船上での写真をいくつか紹介する。



Figure.1 ハナゴンドウの群れ（一部加工）

船首から右側 200m 付近を遊泳していた。写真では 3 頭分のヒレしか写っていないが群れとしては 5、6 頭いたと思われる。



Figure.2-1 オットセイの遊泳 1 (一部加工)

船首の前を横切るように右側から左側に向かって遊泳していた。おそらく 4 頭ほどいた。



Figure.2-2 オットセイの遊泳 2 別角度 (一部加工)

鯨類の尾鰭と比べてオットセイの後鰭は小さい。



Figure.3 船首手前を横切るイシイルカ

観察最終日の観察終了間近に奇跡的に見ることができた。おそらく 4、5 頭の群れで遊泳していたと思われる。写真からではイシイルカの型まではわからなかった。



Figure. 4 アッパーブリッジからの景色
海況に恵まれている時は主にアッパーブリッジ（船の屋上）にて観察を行う。

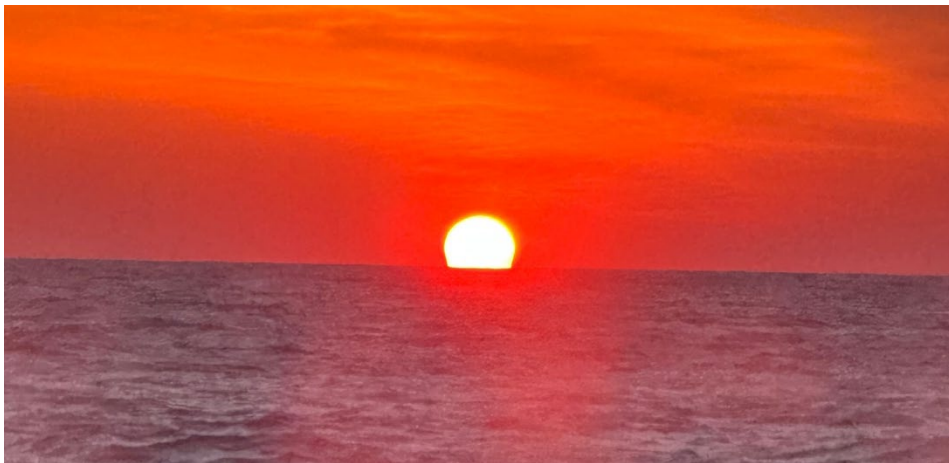


Figure. 5 おしよるまるの窓から眺める朝焼け



Figure. 6 おしよろまるの窓から眺める夕焼け



Figure. 7 船内での食事
魚介中心に提供されることが多かった。新鮮な野菜も食すことができた。味付けはややしよっぱいかもしれない。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

6. その他 (特記事項など)

おしよろ丸の船員の皆様をはじめ、指導して下さった三谷教授にこの場をお借りしてお礼申し上げます。